福岡アジア美術館
Fukuoka Asian Art Museum

もうひとつの「韓流」! ―韓国現代美術　1962-2004

2007年12月13日（木）～2008年3月25日（火）
アジアギャラリーB

日韓共同開催で行われた 2002 年のワールドカップに続いた空前の「韓流」ブーム。韓国は今、戦後かつてないほど私たちの日常の中に浸透し、親しみのある存在となっています。しかし、最新の映画やドラマがあふれる一方で、「お隣の国」の美術については、あまり知られていません。

本展では、60 年代から 70 年代にかけて大きな潮流となった抽象表現をはじめ、その成果を継承しながら新たな境地を切り開いた 80 年代の作家による表現、そして、映像やインスタレーションなど、多彩なメディアを駆使した同時代の作品をとりあげ、韓国現代美術に流れる複数の「韓流」を探ります。

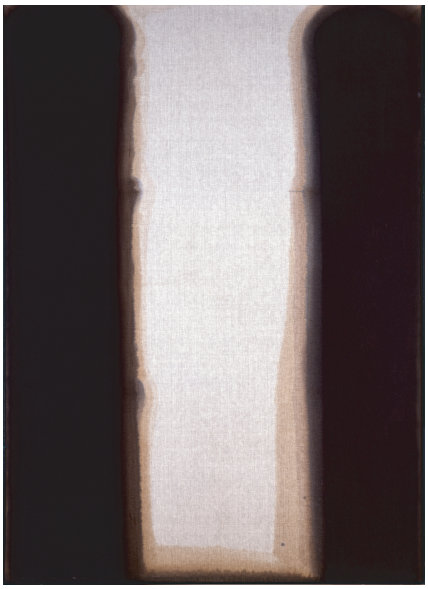
1　新しい時代の幕開け　～アンフォルメル絵画と抽象の展開～

日本の植民地からの解放と朝鮮戦争の混乱を経て、ようやく社会に安定が戻り始めた 50 年代後半の韓国美術界では、官設の「大韓民国美術展覧会（国展）」に反発する形で、在野のグループが相次いで結成されました。中でも最も前衛的とされたパク・ソボらの「現代美術家協会」（1957 年設立）は、「アンフォルメル」と呼ばれる様式の作品で、韓国美術界に新たな時代の幕開けを告げました。「アンフォルメル」とは、「非定形なもの」という意味のフランス語です。第二次大戦後にヨーロッパを中心に展開した抽象表現の運動を指し、キュビズムなど従来の抽象表現を、理知的で冷たい印象を与える「幾何学的抽象」ととらえ、それとは違う、非幾何学的で叙情的な「熱い抽象」を目指しました。アンフォルメル作品にみられる、躍動感あふれる筆致は、東洋の一筆書きに通じるところがあり、単なる西洋の模倣にとどまらない、独自の表現を目指していた韓国の作家たちの共鳴を得ました。これと同時期、ソ・セオクら伝統的水墨画を学んだ作家たちも、「墨林会」（1960 年設立）を結成し、ぼかしや余白といった水墨画の伝統的技法を活かしながら、画面の抽象化を試みています。

ユ・キョンチェ（柳景　）　1962
「季節」　油彩・画布

2　モノクローム絵画の台頭

軍事クーデター（1961 年）で政権を握ったパク・チョンヒ（朴正熙）大統領は、言論の自由や民主化に対する厳しい統制を敷くと同時に、強すぎる西洋の影響下から脱け出し、韓国独自の文化の形成をうながす政策を打ち出しました。そうした変化に呼応するように、70 年代の韓国社会では、伝統的な仮面舞踊、民謡や民画を見直す動きが生まれています。そうした中、美術界を席捲したのが「モノクローム絵画（単色絵画）」と呼ばれる一群の作品でした。1975 年に始まった「エコール・ド・ソウル」展などを舞台に展開したこれらの作品は、伝統的な李朝白磁や青磁を思わせる、白、灰色、茶色、黒など、単色のみを使った純化された世界と、構成のない単純な形体、筆あと、画面上の手作業の反復などの表現方法を特色としました。生乾きの白い絵具の上にシンプルな鉛筆のストロークを反復させたパク・ソボ。キャンバスに自然な絵具のシミを残したユン・ヒョングン。そこでは、作者の無作為であろうとする制作態度が強調されています。また、興味深いことに、戦前から抽象表現を試み、常に時代を先導していた画家キム・ファンギは、この時期、移住先のニューヨークで、チョン・サンファは



ユン・ヒョングン（尹亨根）「茶青色 337-75 #203」 1975

神戸で、国内の動きと同調するように色彩を抑えた絵画を発表しています。80 年代には、手作業の集積や反復で画面を構成するモノクローム絵画の手法を継承しつつ、それを更に発展させたアン・ビョンソクなどの作家も登場します。

キム・ファンギ（金煥基）
「作品 20-V-74」
1974
アクリル・画布

ユン・ヒョングン（尹享根）
「茶青色 337-75 #203」
1975
アクリル・画布

ソ・セオク（徐世鈺）
「群舞」
1979
墨・紙(板貼り)

パク・ソボ（朴栖甫）
「描法 No.27-77」
1977
油彩、鉛筆・画布

チョン・サンファ（鄭相和）
「無題」
1977
アクリル・麻布

アン・ビョンソク（安炳　）
「風の波」
1984
油彩・画布

3　社会へのまなざし～抽象表現の継承と具象への回帰～

1970 年代のモノクローム絵画とは異なり、1980 年代には、作品に、色彩や具象イメージ、あるいは感情表現やテーマ性を取り戻す動きが盛んになります。たとえば、アニメや落書きを思わせる日常生活の中から拾ったファン・ジュリのモチーフや、写真を用いて対象を細部まで克明に再現したイ・ソッチュの作品は、80 年代の作家が、自らを囲む社会状況や環境へと目を開き、新たな境地を切り開いたことを示しています。こうした具象表現へ回帰する動きは、キャンバスから背景にあたる部分を大胆に切り落とし、人間と周囲が一体化する画面構成を試みたオ・ウォンベの絵画作品や、鋳型にはめられた人物を表したユン・ソックの彫刻作品にも確認でき、そこには、人間を翻弄したり苦しめる社会の問題が暗示されています。

急速な経済成長の一方で、依然として、チョン・ドゥファン（全斗煥）大統領下の軍事独裁政権が続いていた 80 年代の韓国では、ノ・テウ（盧泰愚）大統領による 87 年の民主化宣言まで、民主化を望む声は繰り返し封じ込められました。そのはけ口のない抑圧された環境の中、美術家たちのまなざしは次第に自らをとりまく社会状況へ向けられていったのかもしれません。そのような社会の現実を描き出す美術家の動きが、組織化され、民主化運動と結びついたのが、「民衆美術」でした。ミン・ジョンギはこの「民衆美術」の始まりを告げたグループのひとつ「現実と発言」のメンバーです。

ユン・ソック（尹石九）
「人間の絆 86-Ⅱ」
1986
合成樹脂

ミン・ジョンギ（閔晶基）
「薮に開かれた扉 I, II, III, VII」
1975
リトグラフ・紙

イ・ソッチュ（李石柱）
「日常」
1984
アクリル・画布

オ・ウォンベ（呉元培）
「無題」
1989
油彩・布

キム・ホンジュ（金洪疇）
「無題」
1982
油彩・絹、木

ファン・ジュリ（黄珠里）
「追憶祭」
1985
油彩・画布

4　多様化する美術の「韓流」

87 年の民主化宣言、88 年のオリンピック開催、冷戦構造の崩壊を経て、90 年代を迎えた韓国の美術家の状況は大きく変化しました。民主化が進み、海外の美術動向に関する情報の入手や海外渡航が簡単になり、世界を舞台にした交流の活発化が進みました。80 年代末には、通俗的で安っぽい都市文化を作品の中に取り込んだチェ・ジョンファらが新世代の到来を告げ、世界各地の展覧会で注目を集めました。以後、多くの韓国作家が国際的に活躍するようになります。

90 年代から今日までの韓国の現代美術は、かつてのアンフォルメルやモノクローム絵画のような、ひとつの運動や傾向としてくくることはできません。空間全体を用いたインスタレーション、ビデオ、写真など、もはや形式にとらわれない表現が展開しているのです。また、女性作家の活躍も、アジアの中で特に韓国で顕著な傾向としてあげられます。ここでは、歴史・記憶、アイデンティティ、サブカルチャー、ジェンダー（男女間の社会的差異）、都市化、グローバル化まで、現代を生きる私たちをとりまく様々な問題や現象に対し、個々の作家が発する声に、耳をかたむけてみてください。

ソン・ヒョンスク
「59の筆触」
1998
テンペラ・画布

チョン・ヨンドゥ
「エヴァーグリーンタワー」
2002
チバクローム・プリント

ホン・ソンミン
「熊と少女2：眠れる美しさ」
2004
ビデオ（6分）

チョ・ドキョン（曹徳鉉）
「韓国女性の歴史」
1993
木炭、コンテ・画布；インク、写真、木炭、木・紙、木

イユム
「生きている彫刻」
1996
プラスティック、フィルム、ライトボックス、他

チェ・ジアン
「不思議の国のアリス」
1997
アクリル・画布